ヒウザン会とパンの会

高村光太郎

青空文庫

私が永年の欧洲留学を終えて帰朝したのは、たしか一九一〇年であった。

当時、わが洋画界は白馬会の全盛時代であって、白馬会に非ざるものは人に非ずの概があった。しかし、旧套墨守のそうしたアカデミックな風潮に対抗して、当時徐々に新気運は動きつつあった。その頃、有島生馬、南薫造の諸氏も欧洲から帰朝したばかりで烈々たる革新の意気に燃えていた。

私が神田の小川町に琅※洞と言うギャラリーを開いたのもその頃のことで、家賃は三十円位、緑色の鮮かな壁紙を貼り、洋画や彫刻や工芸品を陳列したのであるが、一種の権威を持って、陳列品は総て私の見識によって充分に吟味したもののみであった。

店番は私の弟に任し切りであったが、店で一番よく売れたのは、当時の文壇、画壇諸名家の短冊で、一枚一円で飛ぶような売れ行きであった。これは総て私たちの飲み代となった。

私はこの琅玕洞で気に入った画家の個展を屢開催した。（勿論手数料も会場費も取らず、売り上げの総ては作家に進呈した。）中でも評判のよかったのは岸田劉生、柳敬助、正宗得三郎、津田青楓諸氏の個展であった。

ヒウザン会は、丁度その頃、新進気鋭の士の集合であり、当時洋画会の灰一色のアカデミズムにあきたらぬ連中の息抜き場であった。

琅玕洞を本拠として、多士済々、大体三つのグルウプに分れ、中でも一番勢力のあったのは岸田劉生及その友人門下生の一団であって、私も大体に於て岸田のグルウプであった。その他、川上涼花、真田久吉、万鉄五郎を中心とする一派、斎藤与里を中心とする一派等に分れていた。

われわれヒウザン会同人は、当時、殆んど毎日のように本郷白山の真田久吉の下宿に集合して、気焔を挙げていたものであるが、期熟して、その秋、第一回展を京橋角にあった読売新聞の楼上に開催した。それが又ひどい会場で、天井板のようにガタピシする床には少からず閉口した。

私は油絵三点、彫刻を一点出品したが、岸田劉生は一室を占領し、万鉄五郎また多数を出陳して気勢をあげた。真田久吉の印象派風の作品など当時にあっては尖端をゆくものであった。この第一回展で特に記憶に残っているのは、先頃逝去した吉村冬彦氏（寺田寅彦博士）が夏目漱石氏と連れ立って来場され私の油絵や斎藤与里の作品を売約したことである。当時洋画の展覧会で絵が売れるなどと言うことは全く奇蹟的のことで、一同嬉しさのあまり歓呼の声をあげ、私は幾度びか胴上げされた。

翌年、第二回を開いたが、間もなく仲間割れでちりぢりに分裂し、私や岸田は新たに生活社を起した。この系統が彼の草土社となったのである。

その頃、特筆すべきは「現代の美術」と言う美術雑誌を主宰していた北村清太郎氏で、われわれの仲間ではペエル　タンギイで通っていた。あらゆる意味から、この人ぐらい熱心に当時の美術界に尽力した人はないであろう。

概括してヒウザン会の傾向をのべると、フォウビズム、印象派、後期印象派の三つに分れ、われわれの崇拝の的はゴオガンとゴッホであった。先輩の中で、われわれの兎も角承認したのは黒田清輝氏ただ一人である。

当時、山脇信徳が文展に出品した「上野駅の朝」と題する絵は、当時の新傾向作品の代表的のもので、私は新聞雑誌上でこれを極力賞讃した。

当時、文壇では若冠の谷崎潤一郎が「刺青」を書き、武者小路実篤、志賀直哉等によって「白樺」が創刊され、芸苑のあらゆる方面に鬱勃たる新興精神が瀰っていた。

「パンの会」はそうしたヌウボオ　エスプリの現われであって、石井柏亭等同人の美術雑誌「方寸」の連中を中心とし北原白秋、木下杢太郎、長田秀雄、吉井勇、それから私など集ってはよく飲んだものである。

別に会の綱領などと言うものがあるわけではなく、集ると飲んで虹のような気焔を挙げたのであるが、その中に自然と新しい空気を醸成し、上田敏氏など有力な同情者の一人であった。

パンの会の会場で最も頻繁に使用されたのは、当時、小伝馬町の裏にあった三州屋と言う西洋料理屋で、その他、永代橋の「都川」、鎧橋傍の「鴻の巣」、雷門の「よか楼」などにもよく集ったものである。

三州屋の集りの時は芳町の芸妓が酒間を斡旋した。

パンの会は、当時、素晴らしい反響を各方面に与え、一種の憧憬を以て各方面の人士が集ったもので、少い時で十五六人、多い時は四五十人にも達した。異様の風体の人間が猛烈な気焔をあげるので、ついには会場に刑事が見張りをするようになった。

詩人では当時の名家が殆んど顔を出したし、俳優では左団次、猿之助、段四郎、それに「方寸」の連中、阿部次郎はじめ漱石門下、潤一郎、荷風の一党など、兎も角盛なものであった。

松山省三が「カフエ　プランタン」をはじめたのもその頃であり、尾張町角には、ビヤホール「ライオン」があって人気を独占していた。ライオンではカウンター台の上に土で作ったライオンの首が飾ってあって、何ガロンかビールの樽が空くと、その度毎にライオンが「ウオ　ウオ」と凄じい呻り声を発する仕掛であった。

「カフエにて」と題する当時の短い詩に、

泥でこさへたライオンが
お礼申すとほえてゐる
肉でこさへたましひが
人こひしいと飲んでゐる

○

無理は天下の醜悪だ
人間仲間の悪癖だ
酔つぱらつた課長殿よ
さめてもその自由を失ふな

というのがある。

永代橋の「都川」で例会があった時、倉田白羊が酔っぱらって大虎になり、橋の鉄骨の一番高いところへ攀じ登ったが川風で酔いが醒めて、さてこんどは降りられない。野次馬がたかって大騒ぎになったことがあった。白羊の眼が悪くなったのは、たぶんこんな深酒

が祟っているのだろう。

○

「パン」の会の流れから、ある晩吉原へしけ込んだことがある。素見して河内楼までゆくと、お職の三番目あたりに迚も素晴らしいのが元禄髷に結っていた。元禄髷というのは一種いうべからざる懐古的情趣があって、いわば一目惚れというやつでしょう。参ったから、懐ろからスケッチ ブックを取り出して素描して帰ったのだが、翌朝考えてもその面影が忘れられないというわけ。よし、あの妓をモデルにして一枚描こうと、絵具箱を肩にして真昼間出かけた。ところが昼間は髪を元禄に結っていないし、髪かたちが変ると顔の見わけが丸でつかない。いささか幻滅の悲哀を感じながら、已むを得ず昨夜のスケッチを牛太郎に見せると、まあ、若太夫さんでしょう、ということになった。

いわばそれが病みつきというやつで、われながら足繁く通った。お定まり、夫婦約束という惚れ具合で、おかみさんになっても字が出来なければ困るでしょう、というので「いろは」から「一筆しめし参らせそろ」を私がお手本に書いて若太夫に習わせるといった具合。

ところが、阿部次郎や木村荘太なんて当時の悪童連が嗅ぎつけて又ゆくという始末で、事態は混乱して来た。殊に荘太なんかかなり通ったらしいが、結局、誰のものにもならなかった。

一年ばかり他所へいってしまって、又吉原へ戻って、年が明いたので、年明けの宴を張った。

阿部次郎が通ったのが判った次第は、彼がやってきて、談偶々その道に及び「君と僕とは兄弟だぜ」といったことからである。よくあることだが、私にとっては大事件だったわけだ。

若太夫がいなくなってしまうと身辺大に落莫寂寥で、私の詩集「道程」の中にある「失はれたるモナ・リザ」が実感だった。モナ・リザはつまり若太夫のことで、詩を読んでくれれば、当時の心境が判って呉れる筈である。

失はれたるモナ・リザ

モナ・リザは歩み去れり
かの不思議なる微笑に銀の如き顫音を加へて
「よき人になれかし」と
とほく、はかなく、かなしげに
また、凱旋の将軍の夫人が偸見の如き
冷かにしてあたたかなる
銀の如き顫音を加へて
しづやかに、つつましやかに
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
深く被はれたる煤色の仮漆こそ
はれやかに解かれたれ
ながく画堂の壁に閉ぢられたる

額ぶちこそは除かれたれ
敬虔の涙をたたへて
画布（トワアル）にむかひたる
迷ひふかき裏切者の画家こそはかなしけれ
ああ、画家こそははかなけれ
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
心弱く、痛ましけれど
手に権謀の力つよき
昼みれば淡緑に
夜みれば真紅（しんく）なる
かのアレキサンドルの青玉（せいぎょく）の如き
モナ・リザは歩み去れり

モリ・リザは歩み去れり
我が魂を脅し
我が生の燃焼に油をそそぎし
モナ・リザの唇はなほ微笑せり
ねたましきかな
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは涙をながさず
ただ東洋の真珠の如き
うるみある淡碧（うすあを）の歯をみせて微笑せり
額ぶちを離れたる
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
かつてその不可思議に心をののき
逃亡を企てし我なれど
ああ、あやしきかな
歩み去るその後（うしろ）かげの慕はしさよ
幻の如く、又阿片を燐（や）く烟の如く
消えなば、いかに悲しからむ
ああ、記念すべき霜月（しもつき）の末の日よ
モナ・リザは歩み去れり

雷門の「よか楼」にお梅さんという女給がいた。それ程の美人というんじゃないのだが、一種の魅力があった。ここにも随分通いつめ、一日五回もいったんだから、今考えるとわれながら熱心だったと思う。「よか楼」の女給には、お梅さんはじめ、お竹さん、お松さんお福さんなんてのがいて、新聞に写真入りで広告していた。私は昼間っから酒に酔い痴（し）れては、ボオドレエルの「アシツシユの詩」などを翻訳口述してマドモワゼル　ウメに書き取らせ、「スバル」なんかに出した。

わが顔は熱し、吾が心は冷ゆ
辛き酒を再びわれにすすむる
マドモワゼル　ウメの瞳のふかさ

といった有様だった。当時は又短歌もやっていたが

かの雲をわれは好むと書きをへしボードレールが酔ひざめの顔

などという歌が出来た。

一にも二にもお梅さんだから、お梅さんが他の客のところへ長く行っていたりすると、ヤケを起して麦酒壜（ビールびん）をたたきつけたり、卓子ごと二階の窓から往来へおっぽりだした。下に野次馬が黒山になると、窓へ足をかけて「貴様等の上へ飛び降りるぞッ」と呶鳴（どな）ると、見幕に野次馬は散らばったこともある。

お梅さんが朋輩（ほうばい）と私の家へ押しかけて来た時、智恵子の電報が机の上にあったので怒って帰ったのが最後だった。その頃、私の前に智恵子が出現して、私は急に浄化されたのである。

お梅さんはある大学生と一緒になり、二年ほどして盲腸で死んだ。谷中の一乗寺にその墓があるが、今でも時々思い出してお詣（まい）りしている。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集第4巻」小学館
1989（平成元）年4月1日初版第1刷発行
1994（平成5）年9月10日初版第2刷発行
※「失はれたるモナ・リザ」の詩は、底本では一行が長くて二行にわたっているところは、二行目が3字下げになっています。
入力：門田裕志
校正：仙酔ゑびす
2006年11月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ヒウザン会とパンの会

高村光太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/